第6回

栄光と悲劇の偉人「西郷隆盛」

講談師　一龍斎貞花

米中が、幅広い製品への追加関税は正に報復合戦、日本経済にも影響大。

大老井伊直弼が、日米修好通商条約に調印、その内容たるや関税の自主権無し、治外法権つまり地位協定を認める不平等条約。安政七年この条約協定締結使節の随行艦咸臨丸の艦長を務めて渡米したのが勝海舟。この不平等条約改正は、日露戦争六年後日本の軍事力が認められ改正に五十三年かかった。沖縄の地位協定はもう五十八年経過しているのに、未だ改正されません。

龍馬の船中八策

坂本龍馬が船の中で、後藤象二郎に意見具申した船中八策。

一、幕府は政権を朝廷へ返し、総ての法令は朝廷から出されるべきである。

一、上院、下院の議会を設けて議員をおき、政治上の事柄は議論によって決めるべきである。

一、有能な公家や大名を相談役として官職を与え、有名無実の高官は排除すべきである。

一、開国については広く議論し、正当な条約を結ぶべきである。

一、従来の法令を見直し、憲法を制定すべきである。（明治二十二年5月大日本帝国憲法明治天皇より公布）

一、海軍を拡充すべきである。（日露戦争でバルチック艦隊を撃破）

一、御親兵を設置すべきである。

一、金銀の交換率を海外と均一にすべきである。

政治の根幹について述べている。

地位協定、関税、為替相場は、今も重要問題。

徳川慶喜が、大政奉還を言明。これを聞いた龍馬は、感激し慶喜のために働くことを決意したとも。

龍馬は、有能な公家や大名、そして諸藩民間から人材を登用して全国的に政治の統合を図ろうという考え。この公議政体論を唱え、慶喜再登板を主張されたら思い通りにいかなくなると、あくまで徳川を倒し政治の中心は薩摩長州でと考える西郷隆盛は、龍馬の居場所を歌会仲間を介して京都見廻り役与頭（よがしら）佐々木只三郎に教え、薩摩藩は手を汚さず龍馬を消すことが出来ると、西郷が龍馬抹殺を画策したという説があり、近江屋で龍馬が暗殺された時、西郷はサッと国へ帰っていた。

龍馬暗殺者不明とされるところから西郷説が生まれたのかもしれない。薩長連合に働いた盟友龍馬を、西郷が暗殺の手引きをするはずがない、イヤ西郷ならやりかねないと、それぞれ見方がありましょう。これも歴史の面白さです。

トップの決断

大政奉還は決定したものの、幕府軍の中には主戦論者も少なくありません。

小栗上野介は、日本最強の軍艦開陽丸以下軍艦を、鹿児島・下関・駿河湾に配置し官軍の後続を断ち、箱根を越した部隊には、陸と海から挟み討ちにするという海軍三分の計。後に大村益次郎は、この策のあったことを聞き、「実行されていたら、我々は命がなかったろう」と、言っているんですが、この策を提示されるや慶喜は、

「これを行えば勝敗に関わらず、朝敵の汚名は決定的になる」と、

上野介に「何卒！」と、袖をつかまれる

も振り払い奥へ引っ込んでしまった。

後に上野介は、自分の領地上州で官軍に殺され、赤城山の麓に莫大な金を隠したという、埋蔵金の風評となったのです。

英明の高いと評判だった慶喜に、後鳥羽上皇が鎌倉幕府打倒の兵を挙げた承久の乱の時、北条政子は御家人を集めて決意を促し、動揺する将士を励ましして積極的攻撃策を採用し、勝利を収めた決断と実行力。また函館五稜郭に立てこもり最後まで抗戦した榎本武揚の行動力があったなら、日本の歴史が大きく変わっていたかもしれません。

将兵を見捨てて江戸へ逃げ帰る時、新門辰五郎の娘で愛妾のお芳を軍艦に乗せた慶喜、側近が鼻白むのも当然。

大政奉還し、江戸城明け渡しを評価する説もあるが、徳川幕府を崩壊させた最後の将軍と言われるのも致し方なし。トップの英断、態度というものが、部下を納得させ、いかに大切であるか。戦わぬならば、その意思を示し部下を納得させる必要があったのではないでしょうか。

部下の暮らし、家族のため降参した例は少なくない。滅亡承知で家来が戦いを主張し滅んだ家もある。むつかしい判断ではあるが、それがトップの決断であり、評価は時代と共に変わるケースも少なくない。評価のみを気にして優柔不断はよくないでしょう。

勝海舟の思慮

勝海舟は、大変な肩こりで、肩のこりを小刀で切り取りたいと言ったほど。勝の家は禄高四十俵という貧乏旗本、ご飯に汁、香の物、野菜の煮っころがし程度。当時の貧乏旗本や、一般町人は一汁二菜、夜目刺しをつける位。

長崎の海軍伝習所時代にホットチョコレートを頂いたり、安政七年アメリカへ行った時、アイスクリームを食べて仰天したという記録もあり、後年横浜に住む三女の手土産、外国人居留地のケーキを楽しみにしていた。

日本の学校のアメリカ人教師・ホイットニー先生の娘の日記に、勝の家にドーナツやパンを持って行ったと書かれていて、海舟はふわふわのスポンジ系が好きだったようです。

新門辰五郎と、駒形どぜうで一杯やったという記録もあり、庶民的でした。大久保利通は、西欧視察から帰るや、洋装でワインを飲み、百四十五年前からパン食。大河ドラマもあり、パン屋さんは店頭に、〝大久保利通、百四十五年前からパン食〟なんてPOP広告を出したらどうでしょうね。

西郷は、そんな大久保を見て西洋かぶれ、みっともないと批判しています。

慶応四年二月十五日、錦の御旗を押したてた東征軍は京都を進発。ポン

大総督有栖川宮熾仁（たるひと）親王。参謀西郷吉之助、薩摩・長州兵を主力に、五十余藩の将兵を率いて三月五日駿府へ。先陣は小田原へ到着。ポンポン

慶喜に恭順を勧めた陸軍総裁勝海舟は、徹底抗戦を主張する老中、若年寄を罷免し、戦うつもりのないことを示す一方で、旧幕府の海軍力、抗戦派の会津、桑名藩をはじめ旧幕府が力を合せれば勝算ありと見込んでいた。

しかし、こうした軍事力を背景にして、なんとしても戦わず平和裡に交渉し、江戸を戦火から守りたいという気持ちでした。

東征軍は、駿府城の会議で三月十五日江戸城総攻撃を決定。ポポンポン

海舟はすぐに西郷への手紙を認め、勝海舟、高橋泥舟と幕末の三舟と称せられ、剣の達人で未だ三十を過ぎたばかりながら禅の道を知る山岡鉄舟に、もしものことを考え、西郷の命により江戸で鉞（まさかり）強盗を働いた鹿児島藩隠密益満休之助を同道させ使者として派遣。

「朝敵徳川慶喜の家臣、山岡鉄太郎大総督府へまかり通る、お通しあれ」

ひしめく大軍のなか、小田原を駆け抜け駿府へと。ポポンポンポン

「ナニ、山岡が参ったと、勝さんの使者あらば会わねばなるまい」

死を覚悟の山岡の交渉、そして西郷と勝の江戸城明け渡しの会談。いよいよ面白くなって参りますが、次号のお楽しみ。ポポンポン